

- 季節の花：ユリ・ラベンダー
- コラム：水
- 情報：花のイベント

ふらっとふらわーず ニュース

- 発行：ふらっとふらわーず
- 2016夏号：第15号
- 連絡先：042-682-2835
- 編集委員：内田信子

季節の花

★【ユリ】 ユリ科 / ユリ属

「立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花」美しい女性の容姿や立ち居振る舞いを花にたとえて形容する言葉ですが、ユリに關しての意味は「ユリは美しい女性が歩くようである」「風に揺れるさまが美しいユリは、歩きながら見るのが一番美しい」などの説があるようです。ご存知にしても、**ユリが美しい事**を表しています。

北半球の亜熱帯〜亜寒帯におよそ96種が分布する**球根植物**で、日本にはその中の**15種が自生**します。そのうち**6、7種**は日本にのみ分布する**固有種**です。ヨーロッパではかなり古くから親しまれていたようでクレタ島の遺跡からは**紀元前15世紀**頃のものと思われる「**マトンナ・リリー**」の描かれた**壁画**などが見つかっています。メソポタミアや古代エジプトでは**文様**に使われていました。日本では**古事記**に「神武天皇がユリを摘んでいる娘に惚れて嫁にした」というエピソードがあり、これが日本で最古のユリに関する記述とされます。中世になり、ふすま絵などの花鳥画や浮世絵、織物や衣装、工芸品などにユリが**描かれる**ようになります。**江戸時代**になると、**花の観賞**にも注目されるようになり、ヨーロッパからシールポルトをはじめ植物学者や医者などが派遣されるようになると、ヨーロッパに紹介され、海外の人たちにも注目されるようになります。**明治以降**は、園芸用にヤマユリやカノコユリ**球根の輸出**が始まり、明治末には**重要な輸出品**のひとつになり、その後テッポウユリや様々な違う種同士を掛け合わせ、たくさん**園芸品種**が作られるようになります。

減少したとはいえ、日本には、**ヤマユリ**や**ササユリ**、**テッポウユリ**などが野山に**自生**しており、古くから愛されてきました。庭植え、鉢植え、切り花に加え、**ゆり根を食用**にするなど、様々な楽しみ方があります。ヤマユリは本州の平地から山地に分布し、日陰の斜面や明るい林、草原に見られる球根植物です。7月から8月に**強い香**のある花径20cm強の大きな花を1〜10輪ほど咲かせます。花弁には白地に黄色い帯状の筋が入り、えんじ色か紫褐色の細かい斑点が散ります。ヤマユリとカノコユリやタモトユリを交配して、豪華な花を咲かせる園芸品種の系統、**オリエンタル・ハイブリッド**がつくられていて、その代表的なものが**カサブランカ**です。現在は香りの無いユリや無花粉のユリもあります。野生種には風情が、園芸種には豪華なやわいらしさがあり、それぞれ楽しんでみてください。



花言葉
「純粹」「無垢」「威厳」(hananokotoba.com)
(参考：趣味の園芸、ヤサシイエンゲイ)

★【ラベンダー】 シン科 / ラベンダー属



ラベンダーは鮮やかな**紫色**と心地よい**香**りが魅力の**ハーブ**です。木本性ですが、草花として扱われることが多く、花壇の植え込みやコンテナ栽培などで楽しまれています。北海道富良野の**ラベンダー畑**など、一面に群生させたものが有名で美しいです。香の高く「**ハーブの女王**」ともいわれるラベンダーは、古代ローマ時代から**薬草**として珍重されてきました。属名の学名「LAVANDULA(ラバンジュラ)」は、ラテン語の「LAVARE(洗う)」を語源とし、ローマ人が入浴の際に**ラベンダーをお湯のなかに入れる**のを好んだことにちなみます。花言葉の「沈黙」は、ラベンダーの**精神安定効果**に由来するといわれます。多くの系統(品種群)がありますが、**コモンラベンダー**は北海道のような寒さには強い反面、高温多湿に弱く、暖地での夏越しは難しいですが、「**コモンラベンダー**とスパイクラベンダーの交雑種」の**ラバンディン**は比較的暑さに強い性質をもち、暖地で楽しむにはおすすめです。**耐暑性**は、系統によって**大きく異なります**。

栽培環境：日当たりと風通しのよい場所で
水やり：朝、用土が乾いていたらたっぷりと。夏は過湿にしないように注意
肥料：植えつけ時に、元肥として緩効性化成肥料。生育旺盛な時期に、緩効性化成肥料を追肥
ふやし方：さし木でふやします。春に、枝先(天芽)を長さ10cmほどに切って、赤玉土または日向土に
作業：花二分咲きから満開時に、葉を4〜8枚つけて花穂を切ります

花言葉「沈黙」「期待」
(hananokotoba.com)
(参考：趣味の園芸)



コラム

—熱中症に注意— 水

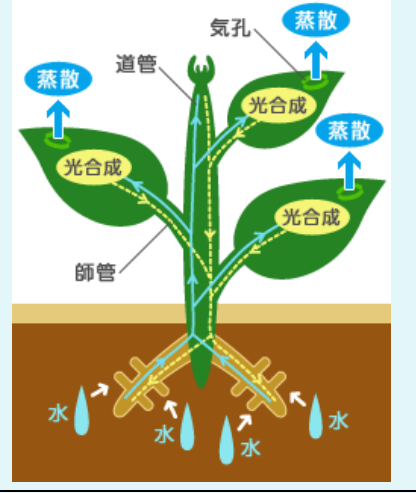
暑くなると、人も水分不足による熱中症が問題になりますが、植物にとっても、**水は無くてはならない**ものです。

植物の体は、**細胞**という小さく区切られた小部屋の集まりからできています。その植物の細胞一つ一つが水で満たされて、その重量の**約80〜90%を水**が占めています。この水が少しでも減ってしまえば、植物は生命活動を維持することが困難となり、植物は萎れ、枯れてしまいます。例えばイネなどは、水分の**10%が失われた**だけでも枯れてしまうと言われています。このように大切な水は、どのような役割を担っているのでしょうか？

まず植物は**根を張り**、自らの体を支えるとともに、その根に生えている細い毛のような**根毛**とよばれるものが生えていて、基本的にはここから水を取り込み、茎や葉へ水を運んでいます。その水の通り道を「**道管**」とよびます。



この道管を通じて上へ、葉の方へと上っていきます。葉に届いた水は、葉脈を通じて葉も潤し、葉で蒸発します。これを**蒸散**といいます。



また、葉では植物にとって欠かすことのできない**光合成**が行われていますが、ここでも**水**が使われます。太陽などの光のエネルギーを使って、二酸化炭素と水から**酸素**と炭水化物やデンプンなどを作ります。炭水化物は**植物の栄養**の基となり、木の幹や草花の茎の中の管(節管)を通じて、今度は上から下へ、根の方へと下っていきます。そして、栄養は植物の体に行き渡り、最後は根まで届くのです。管の中で**栄養は水に溶けていて、水が栄養を運び役目**をしています。このように、**水は植物の体を潤し、栄養を与えながら、植物の体をくまなくめぐっている**のです。

茎や葉の柔らかい植物でも**しっかりと体を支えて**いられるのも、植物の体の9割前後が水で占められていることと関係しています。植物の個々の細胞は外部から水を吸収して**自ら膨れよう**として、**周りの細胞を圧迫**しようとする力が働きます。植物体全体にその力が働くことで**体勢が維持**できるのです。そのため水が不足すれば、その力が小さくなり空気の流れが「**コムマ**」のようになってしまうのです。

そして**蒸散**というのが、主として葉から水分が**水蒸気**になって出ていく現象ですが、葉の水分が水蒸気になる際、**高温時に気化熱を奪**います。それによって土や植物を**冷やす働き**があります。さらに低温時には**熱を放出**することにより、植物が生えている土の温度を**急激に下げない**ような働きをします。

植物に水やりをするのは**朝が適**しています。水やりの後、太陽の光を浴びることで**光合成をいやす**し、それに利用された水を補う**為に水を吸収しやす**くなる為です。さらに夏を初め、風間植物の体の温度が**高くなりやす**るというのを**防ぐ**為でもあります。
(参考：suntheory・学研キッズネット)

情報

—花のイベント— (事前予約確認ください)

- 谷朝顔まつり
7月6日(水)〜8日(金) 台東区入谷鬼子母神
- 浅草寺 四万六千日(ほおずき市)
7月9日(土)〜10日(日) 浅草寺
- ユリさわの「ゆ」園
2016年6月4日(土)〜7月上旬(予定)
- 清瀬ひまわりフェスティバル
2016年8月中旬〜8月下旬 清瀬市下清戸三丁目